

## COIL プロジェクトを通じた学びと発見

2019年の1月から6月にかけて、私はCOILプロジェクトに参加しました。そこでCOIL型授業、学生ワークショップ、TPワークショップでの経験を皆さんにお伝えしたいと思います。

まずCOIL型授業についてですが、私は1月に冬学期集中講義であった「3.11の大災害を文学、文化、メディアから理解する」という授業を受講しました。この授業は「誰が福島を語るができるのか」ということに焦点を当て、漫画や小説、映画といった様々な資料を用いながら東日本大震災について考えるという内容でした。中心となったのは原発事故で、被害を受けた福島の人々、農作物への風評被害、取り残された動物たちなどの問題が作品の中にどう表現されているのかを議論しました。ニュースで報道される事実ではなく、当事者の方々がどう考えて、どんな感情を持っているのかを芸術を通して考えるという手法は私にとって新鮮で、様々な発見がありました。講義の2日目には、カリフォルニア大学アーバイン校の学生さんたちとオンラインでディスカッションを行いました。リアルタイムで顔を見ながら3.11に対する意見を交換することができて、とても良い経験となりました。

以上のCOIL型授業を受講した学生の中から選んでいただき、6月に学生ワークショップとTPワークショップに参加することになりました。学生ワークショップのテーマは「令和」で、外大生とアメリカの大学に通うジャパニーズアメリカンの学生がそれぞれ令和についてのプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションの内容は政治や文化、メディアと多岐にわたっており、日本の見方と海外の見方を比較しながらディスカッションすることができました。ワークショップの後にはジャパニーズアメリカンミュージアムを訪れたり、慰安婦像を見に行ったりと、ワークショップだけにとどまらない学びの機会がありました。そして何より、COIL型授業でオンラインディスカッションをした学生と実際に会えたことが嬉しかったです。



二日間行われた TP ワークショップでは、日本研究をしている教授の方々が日本とアメリカから集まり、現在取り組まれている研究を発表され、ディスカッションを行われました。テーマである「危うさ」を様々な角度から切り込んだ発表をお聞きし、私には難しくて完全には理解できないものもありましたが、教授たちが日本語と英語を入り混ぜて議論をされている姿を拝見できて、まさにグローバルな場に参加した気分でした。私は学会に参加するのは今回が初めてだったので、学会とはどういうものであるか、研究者同士の意見交換などを間近で感じることができ、他にはない貴重な体験であったと思います。また、私はジェンダー論を専攻しているのですが、ジェンダー論以外の分野の専門的な話をお聞きして、自分の専門以外にもヒントがあると気づき、今後の学びへの大きな刺激となりました。

今回 COIL プロジェクトに参加したことで、通常の授業では得ることのできない発見がたくさんありました。これをきっかけに世界に目を向け、これからも学びを深めていきたいと思います。